Title	香港新界の囲郭村落について				
Sub Title					
Author	可见, 弘明(Kani, Hiroaki)				
Publisher	三田史学会				
Publication year					
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.2 (1969. 11) ,p.99(233)- 122(256)				
JaLC DOI					
JaLC DOI Abstract	A visitor to the New Territories of Hong Kong would find such outward appearance of old rural China as a community with four walls all around it forming a square. Each of these walled villages, found mainly in the north sector, claims long historical associations with the past when the area was still part of the San On district, Kwangtung. They are locally called wal (間), having this word as part of villagenames. One can calculate, from an official A Gazetteer of Place Names in Hong Kong, Kowloon and the New Territories, some 110 traditional Chinese place names including the character for wai. However, not all wai indicate that they are walled villages. Wal implies the existence of the bank enclosing the village as well as a fish pond surrounded by the bank. Some of nucleated villages wrong tone earn the description of wai, too. In the course of a tour of folkways' research, I could list only some twenty walled villages in all. Building brick-walls were due mainly to the need in the past for protection, and probably for showing their social prestige. So far as I know, New Territories' walled villages may be divided into four main types. (1) The general pattern of the walled village of this type is that of walled and moated one, such as Kat Hing Wai at Kam Tin, with a tower at each corner. (2) Those without moat. But, it is usual to find a village pond immediately below the village. (3) Brick-walls are humbler and rougher. It is very unusual to find the village of this group with its tower and moat. (4) The Feng Shut (風水) grove just above the village marks the peculiar design as distinguished from the others. There are no pond neither. Generally speaking, these walls are strong and thick, being made with bricks which are black and harder than red ones. Deep moat was dug around the walls. Now moat is not deep because many kind of deposits make it shallow. From the outside, a careful observer may notice some holes in the brick wall-the gunholes. Although the holes are small and inconspicuous from the outside, the				

	share the same ancestor. I do hope something shall be done about it to preserve the walls as something of historical importance and perhaps of a sentimental value to the people right there.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19691100-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 香港新界の囲郭村落について

可 児 弘 明

る。 氹、 べ、立証が難しいからである。 けがまだ十分提出されていない。 圳、「氹 中国の地名は、その土地の自然環境や集落の特性を示すことばで終ることが多い。広東話圏でいうと深圳の圳、 **峯脚下などの「峯」が峯猺の旧居住地を示すというバーネツトの仮説は、事実とすれば興味深いものであるが、裏づ** 集落の特性を示すことばで終る地名についてみると、禾峯、上峯、下峯、大芒峯、 大埔均の均、 蓄水之処謂之氹」、「均 山腰謂之均」、「磡 岸謂之磡」などを意味しており、集落付近の自然環境を示してい 紅磡の磡などは、宣統辛亥(一九一一)の『重修東莞県志』巻十二にいうように、「圳 蜑家湾など、 「蜑家」の二字をふくむ地名が明らかに水上生活者の泊地を示すのにくら 大峯、横峯、 藍峯、峯下や峯径 通水之道謂之 南氹の

いてとりあげてみたい。 前者は墟市を意味しているが、 香港をふくむ広東省沿海地方で、もつとも特色ある地名の一つは、 墟市については斯波義信氏の研究があるので、ことでは専ら「囲」すなわち囲郭村落につ(2) 「墟」や「囲」で終る地名ではないかと思われる。

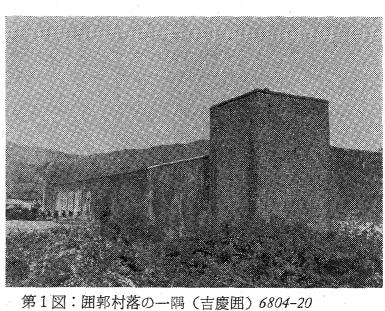
香港新界の囲郭村落について

二三三)九九九

る。 の — なつている。 界址専条」にもとづき英国が清朝より租借した地域であり、 起平野が発達するだけである。 新界というのは、 部をなしていた。 土地は山がちであり、 英国は租借後この地域を New Territories と命名したが、租借以前は香港、 南京条約第三条による香港島割譲、北京条約第六条による九竜割譲についで、一八九八年 深圳河以南、 山が海にせまるため広い海岸平野に恵まれない。 九竜に至る間の大陸部と、大嶼山などの島嶼からなり、 租借期間は一八九八年七月一日(光緒二十四年)より九九年間 わずかに深圳河や印度河に沿つてやや広い隆 面積は約九一〇平方キロであ 九竜と同じく新安県(

という大都市に隣接しながら、 大学出身者で政府の高級行政官であるヘイズ氏の一連の研究においてもよく復原されている。 可能であることを知り、 経済生活において変貌をとげている。しかし九竜山脈を越えて新界に入つた者は、国境まで続く郷村地帯のあまりにも中 スチュワート・ 国的な外観に驚くことであろうし、村落の内に入つた者は文化の不可変的な面が広く残つているのに気づき、香港、 日の新界は、 九世紀末の新界が旧中国からそのまま抜けだしてきた社会であつたことは疑いない。このことは、 例えばカルフォルニア大学ポッター助教授の調査した屛山・坑尾村の場合に示されるように物質的な生活や ロックハートの報告、 奇蹟に近い感を抱くにちがいない。 なお新中国以前の中国を対象とする研究が理想的なフィールドといえないにせよともかく 理民府長官オームの一九一二年の報告などによつて明らかであるし、 租借以来七〇余年を経た今 租借当時の またロ )布政司 ンドン

にあらわれており、 囲いこまれた全ての形状が、 ロンドン大学のフリードマン教授は、 新界地名辞典により香港全体で一六〇〇余の伝統的中国地名をひろい、 かつて墻壁でかこみこまれており、そして今日もまた多分そうであろうことを示している。 必ずしも普通は煉瓦壁と炮楼の存在を意味する囲で敍述しうるわけではない。いくつ 新界の「囲」のつく地名をとりあげ、 「囲の字はいぜん数多くの村の名前 約一一〇が囲の字をふくむと算定



る。

なり多くが囲牆の背後に身をちぢめていたことが了解されよう」と述べていなり多くが囲牆の背後に身をちぢめていたことが了解されよう」と述べてい

「囲」をふく

落名の一部に囲の字をもつわけではないから、英領以前において、

かのトリデは粗末で大ざつぱなものである。

そして、すべての囲郭村落が村

集落のか

む村落名をあげてみると、以下のようになる。 九竜市 ところで政府発行にかかる地名辞典の記載を若干増補して、(8) 沙田方面 西貢方面 香港島 大嶼山方面 黄竹坑旧囲、 馬頭囲、衙前囲 沙田囲、 石壆囲、 黄家囲 山下囲、 南辺囲、 黄竹坑新囲 大囲、 南囲、 北囲 新田囲、

青山方面 掃管笏老囲、 黄家囲、 井頭囲、 新囲仔、 麒麟囲

荃湾方面

大屋囲、

上老囲、下老囲、石囲角

大埔滘老囲、

大埔滘新囲

頭、 屛 元朗方面 Ц 沙江囲中、 厦村方面 青磚囲、 沙江囲尾、 桃園囲、 水蕉老囲、西辺囲、 沙江囲仔、 屯子囲、 青磚囲、 賴井囲、天水囲、馮家囲、\* 南辺囲、大囲、英竜囲、水辺囲、 泥囲、 順風囲、 橋頭囲、 厦村新囲、 灰沙囲、上章囲、 中心囲、西頭囲、大井囲、 広田囲、 西山囲 錫降囲、 新囲、 南生囲 祥隆囲、 沙江囲

香港新界の囲郭村落について

新田方面

東鎮囲、

仁寿囲、

石湖囲、

米埔老囲、

和生囲、

囲仔、大生囲、

新田上新囲、

新田下新囲、壁囲

錦田方面

吉慶囲、

泰康囲、

永隆囲、

錦慶囲、

北囲、

新囲、

新隆囲、

下囲、

石頭囲、

金銭囲、

江夏囲

(二三五) 101

蕉径方面 蕉径老囲

粉嶺方面 粉嶺大囲、 粉嶺南囲、 粉嶺北囲、 新囲、 永寧囲、 麻笏囲、 老囲、 東閣囲、 鶴藪囲、丹竹坑老囲、\* 客家囲

蓮麻坑方面 香園囲、簡頭囲

沙頭角方面 谷埔老囲、吉澳上囲

船湾方面 狗屎囲、囲下村、沙螺洞老囲、 鴉山新囲、 烏蛟騰老囲

大浪方面 張屋囲、林屋囲\*

十四郷方面 企嶺下老囲、企嶺下新囲、

塔門洲 (上囲、中囲、下囲)

右にあげた「囲」の字をふくむ村落は一一二カ所あり、そのうち一〇八カ所までが新界に存在する。筆者は、いろいろ 大埔方面 大埔頭老囲、新囲仔、灰沙囲、 念坑囲、九竜坑新囲、九竜坑老囲、 囲頭村

リードマン教授の予測は必ずしも妥当ではない。その理由の第一は、新らしい村落であつて、旧居住地の村落名をそのま 省における土地利用の特色である圩堤としての「囲」である。 の機会を利用して新界に赴いているうち、\*印を付した二四村落をのぞき、八八村落をチェックすることができたが、 ま移住先に持込んだ例があることであり、具体的には荃湾の大屋囲、錦田の新囲などがこの例にぞくする。第二は、広東 珠江デルタにおいて、泥沙の浮生する地域を田地として開 フ

あり、 を築くことが必要であつた。 周知のように南海県桑園囲に関する研究が森田明氏によつてなされている。宣統重修の『東莞県志』巻二十一**、**隄 十余村を包囲し、 湖尾などの村をまもる五村大囲隄などがみえ、宝安県に近い東莞県においても大規模な基囲築造が行われたこ デルタ中部のいわゆる「沙田」地帯にあたる南海、順徳両県は、 田四百余頃をまもる土瓜十四約基囲、 黄家山などの村をかこむ黄家山基囲、 ことに基囲の築造が盛んで 深巷、壆厦、上

あるいは人命、財産、集落、田地、農作物を洪水や潮水から守るためには、土を掘つて「基囲」(堤防の意味)

発したり、

天水囲、新田の大生囲などがこの例にぞくする。 中心に堤防でかこまれた魚塘が経営されており、そのあるものが て凹んだ部分は魚塘として利用されるから、基囲は「桑基魚塘」の名でも知られる。(ロ) 堤防の上には桑と果樹を植え、その内側に水稲と甘蔗を栽培し、 「囲」と称されるのである。元朗の南生囲、后海湾岸の 桑の間に蔬菜や豆などを植える。 香港新界においては、その西北部を また反対に土を取つ

ぜ囲でよぶかと問うと、家屋の塊状集合を囲とよぶのだと教えられる。 を訪れてみても、 家屋の塊状の集合を示す場合であつて、これが新界ではもつとも多いようである。新界の何々囲と称する村落 現在村落をとりかこむ防壁がないばかりか、過去にも防壁を築いたことのないことが多い。それならな

市については若干研究がなされているが、 多くが囲牆の背後に身をちぢめていた」という記述は、囲牆の中に身をちぢめていた集落は意外にすくなかつた、 すべきであろう。 は一時村落が放棄されたことがある。この条件を考えても、なおフリードマン教授の「英領以前において、 ぎずその数のすくないことが注意される。未踏査の二四村落は国境沿いにあるか、それとも交通に恵まれない遠隔地にあ しても三○村落にすぎない。本地域は清初の遷界令によつて沿海から強制的に奥地に移住させられたため、 つたことが確認されるのは、 つて踏査できないが、理民府の田土課などでえた情報では、輞井囲が唯一の囲郭村落である。また、往昔、囲郭村落であ 一五カ所に囲郭村落が残存している事実は放置しておくにはあまりにも惜しい存在である。ことに我国では中国 以上にあげた三つの例を除いていくと、地名に囲のつく村落が囲郭村落ということになるが、囲郭村落は二五村落にす バルフォーの付図によつて算えても合計二七カ所である。しかしながら、英国統治下にあつて今日なお(ロ) 黄竹坑旧囲、衙前囲、錦田の北囲 農村の囲郭村落については知られていないように思われるので、 (水頭村)と南囲 (錦慶囲) のみであつて、 以下に筆者の これらを総計 集落のかなり 地域によつて の城郭都 と訂正

香港新界の囲郭村落について

見聞なりとも記し関心を喚起したい。

\_\_\_

東人の村落である。また広東系のうち一二囲郭村落は、新界に最も古く有力な宗族である鄧氏にぞくしている。 少数が大埔西北の九竜坑溪谷と、沙田溪谷のせまい冲積平野に立地している。うち二村落は客家の村落であり、 新界の囲郭村落は、 屛山、 元朗、錦田を結ぶ新界西北の隆起平野と、 粉嶺方面の隆起平野にその大部分が所在し、ごく 残余は広

郭村落がある。 落が望見され、 屛山方面の囲郭村落は、 東側には泥囲、 青山道を北上し青山病院を過ぎた辺りからはじまる。まず青山道の西側に屯子、青磚両囲郭村 順風囲、広田囲の順で分布する。屛山地区に入つてからは、厦村道ぞいに橋頭、 上章二囲

- ル四方の土地がかこいこまれているが、 1 屯子囲 Tuen Tsz Wai 青山道の二二マイル標石の辺りより西北へ徒歩五分ほど入つた所にある。約六五メート 内部の房屋は荒廃が著しい。
- 形の土地が防壁でかといこまれている。 2 青磚囲 Tsing Chuen Wai 屯子囲の東北に隣接した陶氏の村落であり、東南方向に六四×七五メートルの長方
- 落であり、 3 泥囲 本地陶氏の創建にかかる。 Nai Wai 青山道の公立興徳学校付近から学校と反対側へ五分ほど歩いた所にある。この付近最大の囲郭村
- 北隅に砲楼がまだ残つている。 4 順風囲 Sun Fung Wai 泥囲に北接する梁氏の小規模な囲郭村落であり、今は防壁を家屋に改造しているが、 東
- 5 広田囲 Kwang Tin Wai 青山道の二三マイル付近にあり、これまた防壁の改造が著しい。

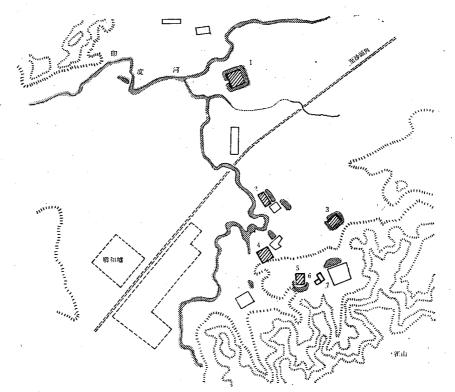
- 6 上章囲 Sheung Cheung Wai 厦村道に臨む屛山・坑頭村西北の田間にあり、 これも鄧氏の創建した囲郭村落の
- 橋頭囲 Kiu Tau Wai これも鄧氏の囲郭村落の一つであり、坑尾村の西南方にある。
- 元朗では、左の囲郭村落三がある。

つである。

- 8 南辺囲 Nam Pin Wai 元朗旧墟の東南角を占め、主として本地、竜氏が居住する。
- 9 大囲 Tai Wai 元朗旧墟の東方にあり、主として本地、黄氏が居住する。
- 10 英竜囲 Ying Lung Wai 大囲に隣接しており、鄧氏の一支族が居住する。
- 11 錦田は鄧氏発祥の地であり、もと鄧氏の囲郭村落五があつたが、現在は次の囲郭村落三になつている。 吉慶囲 Kat Hing Wai 灰沙囲ともいう。明の成化年間(一四六五~八七)鄧伯経によつて開かれたが、

清初の

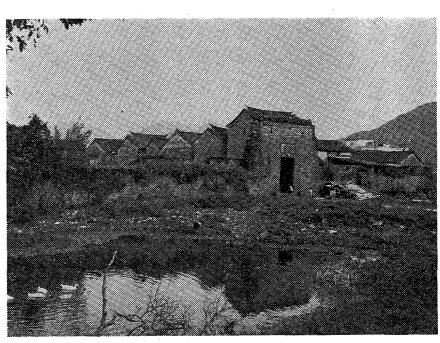
- 康熙年間(一六六二~一七二二) に至り防壁と濠溝をめぐらしたという。
- 12 泰康囲 Tai Hong Wai 錦田戯院の裏側にある。明代、鄧璁によつて開かれ、吉慶囲と同時に囲郭村落の形をと
- の鄧氏が居住していた。(2) つた。現在、西壁を残してすべて改造されている。農学者グラント博士の一九六○年の記述によると、四○家族一九八人
- Wing Lung Wai 泰康囲の東方にあり、がんらい鄧氏の村落であつたが、現在では新来者の客家に賃貸
- した家屋もふくむ。
- (第2図)。やや離れて上水の松柏朗に隣接して客家の一囲が所在する。 粉嶺方面に転ずると、雀山の西北麓から粉嶺・聯和墟に 至る間の 竜躍頭地区に 鄧氏の五囲、さらに 粉嶺に一囲がある
- 14 Lo wai 竜躍頭で最南の囲郭村落であり、雀山西北麓の低いテラスに立地する。その東方に松嶺鄧氏宗祠と



天后庙があるが、 前者は竜躍頭鄧氏の祠堂である。

廃屋と空地とが著しくめだつ。嶺角囲ともいう。

16 15 麻笏囲 Ma Wat Wai 老囲の西北にあり、 東閣囲 Tung Kok Wai 老囲東北方の低い田間にある。六七×四四メートルほどの小規模な囲郭村落であるが、 六○世帯近くが居住するが、 鄧姓は一六世帯しか残つていない。



2 永寧囲 (上)第2図:竜躍頭における囲郭村落の分布。1新囲, 3 東閣囲, 4 麻笏囲, 5 老囲, 6 天后庙, 7 松嶺鄧 氏宗祠

(下)第3図:竜躍頭にある鄧氏の新囲の状景,囲牆の上部はくず れ落ち,水濠は浅くなつている。6844-18

- 17 永寧囲 Wing Ning Wai これも低い田間にある。沙頭角道以南の竜躍頭では、最北に位置する囲郭村落である。
- 18 新囲 San Wai 新囲兵房の西方にあり、新界古村の一つである。 南宋の架閣官、 鄧炎竜をもつて創祖とする。
- 竜囲ともいう。水堀は浅くなり、囲牆もくずれ落ちているが、昔時における繁栄をよくしのばせる。
- 19 粉嶺北囲 Fanling Pak Wai 粉嶺を構成する大囲、南囲、北囲のうち、この北囲のみが防壁を有する。
- 黄家囲と称しているが、 これは、 客家黄姓の居住地であるからである。

Hakka Wai やや遠隔地にある。 楼門に 江夏世居とあり、

梅県出身者であることを示している。

自らは

20

客家囲

埔頭老囲がある。

- 南下して九竜坑溪谷に至ると、坑河という細流ぞいに太坑村があり、灰沙、中心二囲がみられる。さらに南下すれば大
- 村落である。三方に濠溝をめぐらし、 灰沙囲 Fui Sha Wai 上水、大埔間で広九鉄道の車中からも望見できる。 防壁を築いている。 粉嶺道に近く、がんらいは文氏の同族
- 中心囲 Chung Sam Wai 別に岔坑囲ともいい、灰沙囲の西方にある。旧観をかなり失つているが、楼門、 防壁、
- 濠溝は明らかである。同じく文氏の築造にかかる。
- 23 大埔頭老囲 Tai Po Tau Lo Wai 鄧氏にぞくする小規模の囲郭村落であつたが、近年全面的に改築された。
- 最後に沙田について囲郭村落をあげる。
- 24 積存囲 Chek Chun Wai 大囲の一角を占める。
- 25 Shan Ha Wai 曽氏大屋、 曽氏山厦囲などともよばれる。 典型的な客家の囲郭村落であり、 曽貫万によつ
- て創建されたという。獅子山トンネルを通ずる新道ぞいにある。

史

村形式の一つである。 かつた程であるが、 いうまでもなく、 囲郭村落というのは、集落の周囲に防護壁と水濠とをめぐらし、楼門一カ所のみを通じて出入する集 農村においてもまた土塁や煉瓦壁をめぐらし防禦を固める形態をとるものが多かつた 都市の城郭は中国文明の特色の一つであり、 中国人は城郭都市の有無をもつて外国の文明の程度を

ある。 ため、 つめてある。 新界にみる防壁は 煉瓦と煉瓦の間には、 囲牆は 煉瓦は青煉瓦 「磚牆」ともよばれることがある。 「囲牆」とよばれ、長さ三〇、巾一三、厚さ七センチぐらいの煉瓦 (青磚)とよばれるもので、赤褐色の「紅磚」よりはるかに強いものである。 煉瓦造りである 貝殼を焼いてつぶした「石灰」に「禾草」という植物をまぜてつくつたペースト状の物質が (磚)を丹念に積みあげたもので

なつて村落をかこいこむのは壮観といえよう。 から窓一つなく、 に従つて減じついには九○センチ余になるが、高さは地上から六メートル以上ある。これが延長約三○○メートル以上連 囲牆は今日でこそ厄介視され、窓をあけ、家屋に改築され、あるいは取こわしているが、建築当時は防禦のためである 堅固に構築された。吉慶囲では、 壁の底部の巾が一・八メートルあるほどである。 囲牆の 巾 は上 一へいく

るほ ても利用されたことはいうまでもない。ここが防禦活動の中心となるわけであるが、 濠溝」、 灰沙囲のごとき中規模の囲牆になると、高さは地上から四メートル、部分によつては五・五メー か、 0) 四隅、 随所に ばあいにより「涌」とよばれる水堀であつて、 または 「鎗眼」 一隅は、 (銃眼) をうがつている。 囲牆より一段高い塔状の構築物となることが多い。 村落によつては、 環濠の形をとるばあいには巾も広く、 鎗眼は囲牆にも設けられている。 これは 防禦体制をさらに強化しているのは 「砲楼」と称され、 一八~二七メートル 砲楼が物見台とし 大砲をすえ んもあ



囲牆内側から見た鎗眼 (新囲) 6844-28

である水蓮葉や荷葉を栽培した

堀は防禦施設であるが、

豚の餌

にふさわしいものであつた。水

るのによく用いる「深溝高塁」

中国人が囲郭村落を形容す

る。

今日では底さらいを行わな

ているが、

がんらいはもつと深

いので水深一メートル位になつ

り、

魚やアヒルを飼養する経済

活動の場でもある。

(下)第5図 交通は、すべて楼門一カ所によ こまれた 囲郭村落と外社会との つて行われる。バルフォーによ 磚牆と濠溝によつて二重にか

つて厳重に閉ざすことができる。

囲や老囲のごとく華麗なものから質素なものまで各種みられるが、いずれのばあいも鉄扉か十段近い「閂」(横木)によ

サイド・ゲートは確認できない。

楼門の位置、

方向は一定せず、また新

るが、

今日のように囲牆が改造されたあとでは、

ると、

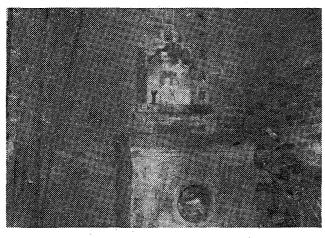
囲郭村落は楼門一カ所ではなく、

「ふつうの(楼門に似た)柱楼とブリッジをもつた側門」があるということであ

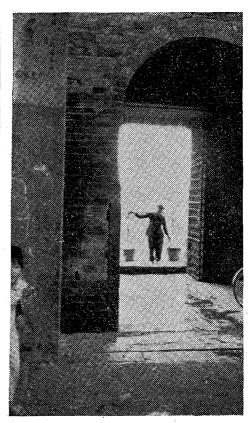
香港新界の囲郭村落について

一〇九

史







囲郭村落の楼門 (新囲) 6844-21

第7図:楼門内の土地公(新囲) 6844-36

(下) 第8図: 匾額(永隆囲) 6805-13

著者鄧文蔚のものだという。

科挙試験が中国読

子弟の教育を行つたとみえ、今日でも書室の建

には、新界の大地主階級は盛んに書室を開設し、

書階級注目のうちに花々しく行われていた時代

9 図 ) では、 ない。 康熙乙丑(一六八五)の進士で『燕台新芸』 丑科会試中式六十八名鄧文蔚立」とあるのは、 永隆囲にある進士匾額のうち、 匾額 を示している。さらに鄧氏の永隆囲に今日も残 囲の福沢を司る神として祀つている。 がないと土地 灰沙囲などのように二階建のばあいもすくなく らいがある。 つているように、 楼門は一 (牌匾) もまた楼門にみられたのである。 があつて、 朝晚、 もし囲郭村落の外部に土地公を祀る神祠 階建であるが、 永隆囲には、 輪番制によつて香燭をささげるな 公の像を楼門の一隅に安置し、 科挙諸段階の合格者があげた 軒十日ずつで交替すること 輪番を示す木札 麻笏囲、 左端に 粉嶺北囲 また楼門 「康熙乙 (第

(二四四)

本囲 [輪朝晚香燭每戸十日 月週而復始上至下

満泉 永寿 金溪 桂芳

を外に誇示し、

内には子弟の勉学を促し、

の緊密な共同意識を涵養するとともに、

多数の同族を官人層に送りこんだ伝統

ひいては絶えることなく官人を補充

一端をも果

門は単なる出入口ではなく、

物が各地

に残つている。

鄧氏はそのもっともたるものであろう。

土地神の祭祀を通して、

囲内に集団居住するもの

要するに、

灼堂

嘉娘 久娘 蟻財 振光

煥求 英光 顕裕

興来

伯亭

金発

丁財両進

福寿康蜜

湯文

禄栢

康懷

衍堂

第9図:錦田・永隆囲の輪番札

していたわけである。 囲郭村落の概略は右のごときものであるが、 実際の平面形は数種類に分けて

し、これによつて生ずる利益を同族に環流せしめようとする機能の

考えうる。 第 類A型と仮に称するのは、 第10図1や2に示すように七六~八

をめぐらし四隅に高い炮楼を築造している。 〇メートル平方を占拠する大村落であり、 正方形のプランをもち、 錦田の吉慶囲 (第10図1)、 環濠と囲 泰康

囲 永隆囲、 屛山の泥囲(第10図2)、竜躍頭の新囲がこの型にぞくする。 いく

とした富裕な広東人農民によつて創設されている。 れも山麓を離れた平野に位置しており、 鄧氏や陶氏のごとき稲の二期作を背影

ら村落の中央を道がまつすぐ通じて祠堂に達する。 吉慶囲にあつては、 祠堂はこの地方で「茶桶耳 楼門

とよぶ封火山墻を有しており、 旧慣によれば囲内の住宅はすべてこの祠堂より

ずる道はきよくたんに狭く、 を囲外に転ずると、 楼門前に広大な広場がある。 巾員は ー・ニメー 1 ここは農作物の乾燥に使われるだけであり、 ル を越えることはない。 また道の端に排 水用 広場に家屋を建てることは 0 溝が設けられてい る。・眼

家屋はこの道と垂直に左右五列にわたり対称的に排列する。

との

一列と他の一

列との

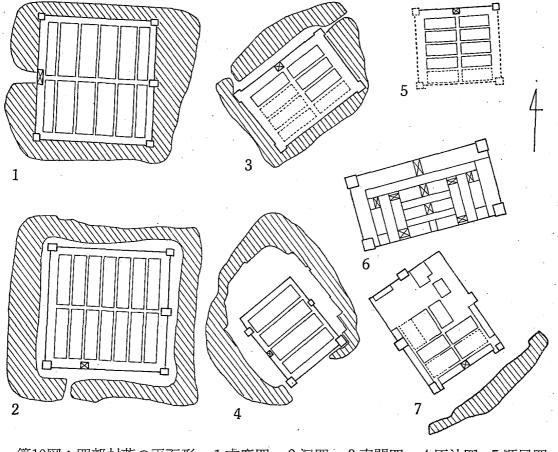
間を通

香港新界の囲郭村落について

低くなければならなかつた。

(二四五)

史



2 泥囲, 第10図:囲郭村落の平面形, 吉慶囲, 3 東閣囲 1 6山下囲, 7青磚囲。斜線の部分は水濠ないし池塘を示す。

いる。

が、 は、 た竜躍頭では数カ村が共同で祠堂を有するため、 うである。 楼門と各家屋の小門はいずれも西面しているが、こ 風水の上で好ましくないとされでいる。吉慶囲では 囲では囲郭内に祠堂はなく、 では東南角、 れも風水の関係によるのである。 泰康囲も吉慶囲とほぼ同一のプランを有していた 左右対称の排列を示しても、 家屋は対称的な排列を示さず雑然としていたよ ところが、 後者では西南角に設けられている。 永隆囲や泥囲 文武庙がこれに代つて 楼門の位置は前者 (第10図2)で 新 ま

ある。 異るように思われる。 の広場があるが、 したものであつて、がんらいは家屋があつたもので 新囲では囲郭内に「禾堂」とよぶ穀物乾燥のため なお、 囲郭内に広場のないことで中国北方のそれと 新界の囲郭村落は、 現今、 囲牆の裏側には倉庫、 これは明らかに廃屋の部分を利用 井戸も囲郭外にあることが多 円形プランのものがない 豚小屋があ

二四六

の農耕や雑事に使用され、械闘に際して兵士としてかりだされる「下佚」などの集団は存在しなかつたという。 の構築者より耕地所有のすくない稲作農民によつて構築されたものと思われる。灰沙囲では、子供の時に買われて、 コンビネーションを示すが、平面は長方形となり、広さはA型の約二分の一になる。立地条件はA型とかわらぬが、 第一類B型として分類しうるのは、東閣囲 (第10図3)、灰沙囲 (第10図4)、岔坑囲などであり、濠溝、 囲牆、 炮楼の 主家 A 型

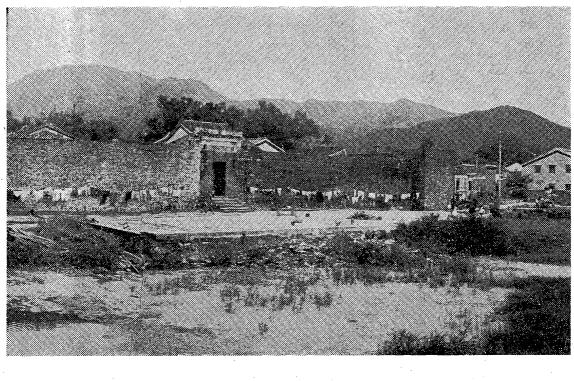
なるが、ともに鄧姓の囲郭村落である。 しうるから、この点を強調すればB型となる。橋頭囲は隆起平野に、老囲は山麓に位置しているから両者の立地条件は異 方にとどまり、 次に第一類
C型とするのは、
橋頭囲や竜曜頭の
老囲にみとめられる設計であつて、
囲郭をとりまく水堀は三方ないし二 かつ炮楼を構築しておらぬのが特色である。もつとも老囲のばあい北壁に突出部があり、 炮楼として利用

囲も第二類にふくめてよい と炮楼 に池塘を有するが、これは囲郭の形をとらない一般の広東人村落によくみるパターンでもある。上水に近い客家囲も囲牆 は平野中の微高地に立地し、背面は微高地によつて保護される関係上、前面と側面だけに炮楼を築いている。 第二類は広東人、客家のいずれにもみられるものであり、囲牆と炮楼からなり、環濠はみられない。青磚囲(第1)図7) 一カ所からなつている例である。 約五〇メートル四方の非常に小型の囲郭村落である。 順風囲 (第1図5)や屯子 また楼門前

磚牆を有するが、 の三囲をのぞいて、いずれも池塘を有している。 三類では濠溝も炮楼もなく、 第三類は、 前引フリードマン教授の「いくつかのとりでは粗末で大ざつぱなもの」に相当する囲郭村落にぞくする。第 広田囲、 上章囲、 ただ囲牆をもつて村落をかこみ、 南辺囲、 英竜囲、 永寧囲、 積存囲では、囲牆も簡略なものである。 一般に簡単な楼門を設けたにすぎない。 麻笏、 麻笏囲は堂々たる 広田、 積存

香港新界の囲郭村落について





る。 の家屋が左右に建てられてい 置する楼門をくぐると、横に さらに三列と垂直方向に二列 た対称的な配列といえよう。 貫いて真直に通じているか が、楼門より道はこの三列を 三列の家屋が排列している が特色である。次に北壁に位 ている。これに対して前面は 「禾坪」とよぶ広場となるの これまた中央道を軸にし 人口の増加に対処した増

いえば上中下の三庁と左右の横屋からなつていると。山下囲は客家 建築の典型だが、まず山麓に立地しており、長方形プランをもつ囲 剣冰女史によると、東江、北江、韓江方面の客家の屋宇建築は広府、 郭の背後に「風水林」を有し 第四類としてあげるのは、沙田の山下囲(第10図6)である。許 潮州人のそれと異なる別個の様式を有するが、それは一口に

漳州、



第12図:山下囲 C6710-24

(三四八) <u>一</u> 四



:灰沙囲全景 6844-8,9,10

軒あるいは数軒のものが連なつ 集しているわけではなく一棟二 うに、磚石を積みあげたばあい 雨今尚黝堊砌以磚石」とあるよ 十四年)に「房屋多土牆但蔽風 て各々の列を構成している。 が多いが、今ではコンクリート (英坭) の使用も多くみうける。 『重修新安県志』巻二(嘉慶二

その上端は三又の飾りを有している。 楼を残し堂々たる風格をそなえている。 なる点である。 築部分である。また井戸が囲郭内にあることも、広東人のそれと異 囲牆は現在住宅に改造されているが、 炮楼上部は茶桶耳となり、 四隅になお炮

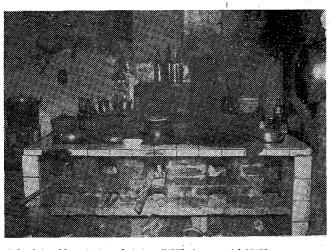
## 匹

次に囲郭内の家屋について記しておく。

囲郭内の家屋は雑然と密



(三四九) 二五

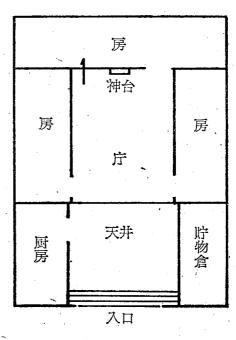


(新囲) 厨房の灶(新囲) 6844-32 (右下の三図) 第16図:家屋の間取り(一階及び 二階と断面形)(灰沙囲)

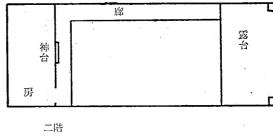
から、

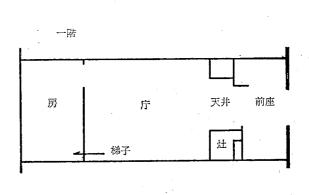
天階によつて採光をはかり、

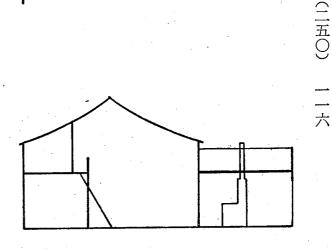
かつ短い冬より長い暑さをすこしでもし



廊 露台 房







るが、 階 井とは室内に光と風をとりいれるため上を露天にした区画のことであり、 浮彫りなどをみることができる。 とよぶ美しい反りのある屋脊 く簡単な木框か金網が設けられているだけである。 (天井) 各住宅は平面が長方形であり、これを二し三部分に分つている点で共通す 第14図に示す例では、 があり、ついで「庁」、「睡房」となる。中国でいう天階ないし天 間取りが三部分からなる。 (第13図) 出入口周囲の化粧縁、 閉鎖的な家屋構造である 小門を入るとまず天 装飾的な

があり、 のごうとするのである。 りは新しいものとみてよい。 しくはリビング・ルームといつた役割を果しており、その後壁は祭祀の壇、すなわち「神台」となる。庁の左右に小 0 は洗濯などをするから、 区画である。 が二階へ通ずるばあいもある。 寝室となる。第三の最も奥まつた部分も寝室であるが、 天階を中心として左右を台所と物置にあてるのは、ほぼ一定した間取りのように思われる。庁は この部分の床は傾斜をもつ石畳かコンクリートであり、鶏を調理したり野菜を洗つたり、 機能上、部屋というよりは中庭のごときものである。 室内には天井板を全くはらず中二階式にしている。 第16図の例は、灶に煙突が施設されていることからも想像されるように、第14図例よ 家によつてはこの部分はない。 天階の左は厨房 (台所)、右が貯物のため また神台のわきから ある 部屋 ル 「褛 \$

つては囲郭外に建てた共同便所を利用する。 新界の古い家屋では、室内に厠がない。馬桶の底に灰を厚く敷いたものや、金属製の尿器を用いて処理するが、 所によ

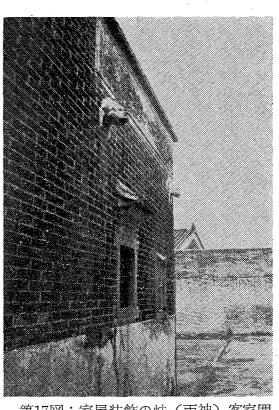
主要なものである。現在、囲郭村落の従来からの住居者が囲外に住宅を建てて移り、旧居を賃貸ししたり空屋で放置する 傾向が強いのは、右にのべた悪条件にもかかわりがある。 窓はきよくたんにすくなく通風と採光は最悪の状態にある。室内の家具は一般に簡素であつて、 椅子、卓、寝台がその

施す」のである。 るのは、 うける。 字で書いた赤色の招福木札や、八卦あるいはその下に貔貅(ฐ)にまたがる紫薇の像を画いた破邪の木札をさげ、 正月前には対聯その他紙製の各種の招財、 住宅には在来の民間信仰、俗信をうかがう上で興味深いまじない札などが豊かである。入口には、 窓に小壁があるばあいには、千祥雲集、吉祥、喜出望外、その他の吉句を記す。 福徳の福に当るが為めにて、彼等は頭上を打たれても金を得たしとの観念強く、 上水の客家囲では、 蝙蝠はもちろん、招財、 招福符を見ることができる。 招福の象徴として歓迎される金魚のほか、 「左字」といつて、文字を反転させたのもよくみ 中国の住宅に蝙蝠の装飾をつけ 唯福を希うが為め、 「天官賜福」と金文 第17図にみられ また旧

香港新界の囲郭村落について

るように、

蛙の飾りが外壁にみられるのが注意される。



6846-7

をひき起したほどである。

になやみ旱魃が恐れられた。

水不足はしばしば村落間の

部も島嶼も淡水の規則的な供給源がないため、

乾期の水不足

新界は大陸

ح れ

は雨神としての役割を蛙に期待するからである。

平均人口が一〇〇人前後であつたこと、 ぎる数字である。もちろん、 新来者を加え、 ならびに五○○人を越えるものが墟市であつたことを考慮にいれても、 囲壁を家屋に改造した現在の住民数は参考程度にしかならないが、 が租借当時、 年とでは、 における資料を提供する。 口を示唆すると見ねばならない。当時新界における一村落の 村落内の人口についてのべてみると、第1表が今世紀初頭 新界の人口総数に変化がないので、 そしてたぶん租借以前における各囲郭村落の 租借の一八九八年ごろと一九一一 第1表の数字 若干低 つの疑

問点としてあげておく。 かつ物質的に示すものといえる。なかでも早く新界に来住し、肥沃な平野を占拠し官人と富商を出した鄧氏に関するもの 頃陽春県令をつとめ、 新界の鄧氏が始遷祖としている鄧符協は が優越する。鄧氏は古い時代に湖南、 すでに記したように、囲郭村落は多く同族村落として出発している。従つて新界の囲牆は同族村落の存在を最も具体的 退官後、 今日の錦田に来住し、学校を開設し祖先の墓地を移したという。 江西に居住したといわれるが、族譜は鄧漢黻なるものを一世祖としている。今日、 世祖の曽孫である。 符協は江西・吉水県の人であり、 羅香林教授、 十一世紀初頭もしくは中 宋学鵬の家

祖を共有する成員のばあいはもちろんであるが、新界の鄧氏は開祖、

エジの分枝組織が複雑となり、

成員間に自ら富者と貧者を生じ、争いや妬みが絶えないのも事実である。

始遷祖を同じくするところから相互に血縁意識が強

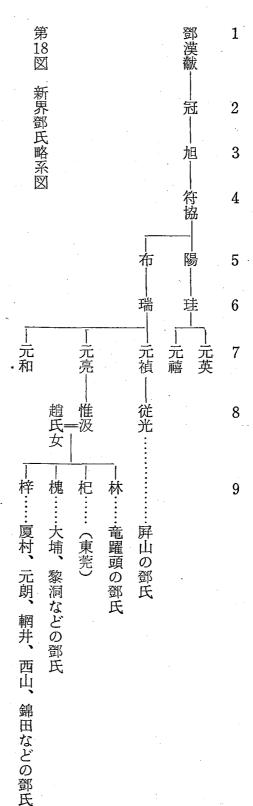
しかし直接開族

大									
大世祖および「五元」とよばれるとしては、解出 囲 田田田田 170	じま		研	村落名	男 子	女 子	<b>=</b>	備考	
(180)	る。	に声	究(6	屯 子 囲	36	36	72	(145)	
中山		接	() ()	青磚囲	35				
中山	Ħ	関	یخ	Ī	59	55	114		
中山	では	係け	すく	順風囲	70	66	136		
中山	19	なな	٤	広 田 囲		<del></del> ,			
一部氏のでとく、直接の開展組から三十世代近く経ているものがあるので、リネエジ、サブ・   日本	屛	63		上 章 囲	52	67	119	(210)	
のでとく、直接の開展	凹密		山山	橋 頭 囲	71	81	152	(420)	
のでとく、直接の開展	氏	界	祖	南辺囲	223	296	519	(820)	
では、	0	K	•	英 竜 囲	38	56	94	(190)	
では、	ک	送	十	大 囲	96	101	197	(340)	
では、	₹,	て	祖	吉 慶 囲	122	100	222	(410)	
18   17   16   33   -		は、	おト	泰 康 囲	43	51	94	(215)	
18   17   16   33   -	接	第	び	永 隆 囲	51	48	99	(250)	
A	0	18		老 囲	. 17	, 16	33	· —	
A	開佐		ユー	麻笏囲	28	21	49		
から三十世代近く経ているものがあるので、リネェジ、サブ・  R とよばれる七世祖のうち元英、元禧、元和は東莞に居住したので、リネェジ、サブ・ルので、リネージ、サブ・ルので、リネージ、サブ・ルので、リネージ、サブ・ルので、リネージ、カールので、リネージ、カールので、リネージ、サブ・ルので、リネージ、サブ・ルので、リネージ、カールので、リネージ、カールので、リネージ、カールので、リネージ、カールので、リネージ、カールのでは、カールのでは、カールののでは、カールののでは、カールののでは、カールののでは、カールののでは、カールののでは、カールののでは、カールの	祖	簡		東閣囲	34	31	65		
でいるものが洗えり、元 で、 リネェジ、他は 東莞に に が、 元 で、 リネェジ、 で、 と の が は 東 デェジ、 かん と の が かん は 東 デェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 と の で で、 と の で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で で で で で で で で で で で で で で で で	か		と	永 寧 囲	21	19	40	<u>:</u>	
でいるものが洗えり、元 で、 リネェジ、他は 東莞に に が、 元 で、 リネェジ、 で、 と の が は 東 デェジ、 かん と の が かん は 東 デェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 と の で で、 と の で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で で で で で で で で で で で で で で で で	511	112	よば		29	. 28	57		
でいるものが洗えり、元 で、 リネェジ、他は 東莞に に が、 元 で、 リネェジ、 で、 と の が は 東 デェジ、 かん と の が かん は 東 デェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 と の で で、 と の で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で で で で で で で で で で で で で で で で	<u>+</u>	れ	れ				<del></del> ,	_	
でいるものが洗えり、元 で、 リネェジ、他は 東莞に に が、 元 で、 リネェジ、 で、 と の が は 東 デェジ、 かん と の が かん は 東 デェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 リネェジ、 と の で、 と の で で、 と の で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で、 と の で で で で で で で で で で で で で で で で で で	世代	たト	るト	客家囲				<del></del>	
でいるものが洗えり、 一根	近	ろう	世	灰沙囲	47	70	117		
でいるものが洗えり、 一根	<b>₹</b>	に	祖	中 心 囲	52	60	112	. <del></del>	
山 ち 元 ち 元 表 で 田 24 32 56 (560) 第1表: 1911年5月現在の人口 Report on the Census of the Colony for 1911 (Sessional Papers Hong Kong, No. 17, 1911) の19表により集計。備考欄() 内の数字 は『香港九龍新界地名辞典』による人口。 は『香港九龍新界地名辞典』による人口。 サブ・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア	経て		うう	大埔頭老囲	33	31	64	(210)	
が 従 元 Report on the Census of the Colony for 1911 (Sessional Papers Hong Kong, No. 17, 1911) の19表により集計。備考欄()内の数字で、和は『香港九龍新界地名辞典』による人口。 は『香港九龍新界地名辞典』による人口。 は 東 完 に 東 完 に 所 住 し た よ の	V)	Щ	ち		_		, <del>-</del>	, <del></del>	
が 従 元 Report on the Census of the Colony for 1911 (Sessional Papers Hong Kong, No. 17, 1911) の19表により集計。備考欄()内の数字で、和は『香港九龍新界地名辞典』による人口。  他は東京・ 完 に 居 に ジ、 チェジ、 子 に 居 し た よ の	る		元	山下囲	24	32	56	(560)	
- ネーは ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	があるので、リネェジ、	が従光より、他は元亮の孫三人より、元禧、元和は東莞に居住したので	があるので、リネェジ、サブ・従光より、他は元亮の孫三人よっ。	、元禧、元和は東莞に居住したの	Re 19 19	eport on th 11 (Session 11) の19表り	he Census al Papers てより集計。	Hong Kon 備考欄(	ng, No. 17, )内の数字

第1表:1911年5月現在の人口

史

く、成員は宗族の村落へ自由に移住しえたほどである。



に一般の「阿爹」を用いず、「舎」(e/ト゚๑゚)と呼んでいた程である。 神は、槐の父、すなわち八世祖の惟汲を税院郡馬、槐の母 (鸞སསས།) を南宋光宗の皇姑とする鄧氏のエリート意識にも関係 官の郷事局を必要としなかつた唯一の地区といわれ、香港政庁は直接この地区に干渉しえなかつた程である。 している。 ことに錦田の囲郭村落五カ所に拠つた鄧氏は地縁血縁を通じ同族結合が強く、その自治意識によつて錦田は後年まで半 槐の母が宋室の姫であるというのは史実ではないけれども、皇姑説を信ずる鄧氏の成員は、父にたいする呼称 強い自治精

風、洪屋、 を有し、 はない。 錦田鄧氏は、 古い有力な同族村落に囲牆を構築するものとそうでないものとがあつたわけである。 同族の囲郭村落である大埔頭老囲(一名水囲)と互いに信号を交し、 灰沙で囲牆をめぐらした歴史はない。竜躍頭鄧氏のばあいも祠堂村に囲牆はない。 かつてすべて囲郭村落であつたが、屛山鄧氏の八カ村落では橋頭囲と上章囲を除き坑頭、坑尾、 敵襲の際は大埔頭老囲の囲郭内へ避難した また、大埔頭では炮楼のみ 厦村鄧氏の諸村落にも囲牆 新村、 塘

囲郭村落が三カ月間攻囲されたことを述べている。防禦という目的は否定しえぬところである。 囲郭村落は賊の襲来時に備え住民にできるかぎり安全性をあたえ、また乾期の水不足などから生じやすい部落紛争に関 自己の村落をより強力な位置におく目的であつたことは疑いない。ロックハルトは前引報告の二五三頁で、 竜躍頭の

本地域は艇盗の乱をはじめとする海盗になやんだ歴史がある。 『重修新安県志』巻十三には、一四九三~一八一〇年の

間に発生した冦盗二五件が記録されている。

く、例えば堂々たる建築による自己主張など、個人のレベルで出現したことを暗示するものかもしれぬ。 の形であつたかどうかも検討してみねばならぬ。若い時に械闘で雙眼となつた粉嶺居住の一老人は、械闘でさえ囲牆は無 力であつたと証言している。さらに、囲郭の居住様式をとらぬ有力古村の分布は、囲郭村落の発生が社会的レベルではな しかし県城を抜く海盗や組織的山盗に、果して農民が対抗しえたかどうかは疑わしいし、 盗賊と農民とが常に武装対決

には多くの実地調査が必要であり、研究者から研究者への連続的な調査と討論が望ましい。囲郭村落の所在と現状を記録 的な同族の自治組織、自治活動、 し参考に供する意味もそこにある。 小稿は新界における同族村落研究の第一歩として、囲郭村落の物質的構造に関する報告を主眼とするものであり、 同族村落相互の社会関係、異姓雑居など問題の核心についてふれえないが、問題の解明

- (-) K. M. A. Barnett, The Peoples of the New Terri-Braga, Hong Kong 1957, p. 261 Kong Business Symposium complied by
- (2) 斯波義信『宋代江南の村市と庙市』「東洋学報」四四巻 一九六一年

- (α) J. H. S. Lockhart, Report on the New Territory 251-292 during the First Year of British Administration. Hong Kong Legistlative Council, Sessional Papers 1900, pp
- (4) G. N. Orme, Report on the New Territories 1899-

- 5 of the Royal Asiatic Society, Vol. 3, 1962 Territories in 1898. Journal of the Hong Kong Branch James Hayes, The Pattern of Life in the New
- (Φ) J. M. Potter, Capitalism and the Chinese Peasant: Social and Economic Change in a Hong Kong Village. Berkley & Los Angeles 1968
- (\(\cappa\)) Freedman, Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung. N. Y. 1966, p. 20.
- (∞) A Gazetteer of Place Names in Hong Kong, Kowloon and the New Territories. Hong Kong n. d.
- 9 森田明『広東省南海県桑園囲の治水機構について』東洋学 四七卷二号、一九六四年
- 10 梁仁彩『広東経済地理』北京、一九五六年、五四~五五頁
- 11 Hsia Monthly, Vol. 11, No. 4, 19 S. F. Balfour, Hong Kong before the British, T'ien
- 12 Kong, Hong Kong 1960, p. 115 C. J. Grant, The Soils and Agriculture of Hong
- 13 ら嘉慶二十四年までに五六人の科挙諸段階合格者がある。その 姓が各一人となっている。 うち四八人までを鄧氏が占め、他の八人は、上水の廖姓が三人、 金銭の侯姓、屛山の蘇姓、元朗の李姓、羅湖の袁姓、新田の文 嘉慶重修『新安県志』をみると、本地域において、清初か

## 二五六

- 14) 許剣冰『獅子嶺与清初香港九竜新界之遷海与復界』「一八 四二年以前之香港及其対外交通」第二刷、香港 一四九頁 一九六三年、
- (15) 貴島克已編『支那住宅誌』大連 五五頁 一九三二年、二五四~二
- 16 る。 宋学鵬が The Hong Kong Naturalist 六巻三~四合併号 Legends and Stories of the New Territories (III) があ 三~四合併号(一九三八年)と六回にわたつて掲載した英文の (一九三五年)、七巻一号、二号、三~四合併号、八巻二号、 羅香林『一八四二年以前之香港及其対外交通』第九章及び
- 17 Kong 1964, p. 40 published by Hong Kong Branch of R. A. S., Hong Aspects of Social Organization in the New Territories Hugh Baker, Visit to Ting Kok and Taipo Tau.